

(様式1) 実践事例

学校名	福島市立蓬萊中学校	校長名	大橋 誠寿		
住所	福島市蓬萊町五丁目14-1	児童生徒数	364名	学級数	15
TEL	024-548-5670	ホームページアドレス	http://www.schoolweb.ne.jp/fukushima/hourai-j/		

**生徒主体の授業を展開し、確かな学力の向上を目指した授業実践
～コミュニケーション活動の支援を通して～**

目指す生徒像

- 自ら学び、自ら考える生徒
- 豊かな心を持ち、他を思いやる生徒
- 正しく判断し、実践する生徒
- 汗を流し、心身を鍛える生徒

1 少人数指導の計画等

(1) 少人数学級の利点を生かし生徒一人一人にきめ細かな指導を行い、学力向上の土台となる望ましい学級・学習集団を育成する。

① Q-Uテストから「個人の心的内面」「学級の集団としての状態」「学級における生徒たちの関係」をとらえ、安定した望ましい学級集団をつくる。

(2) 第1学年においては、少人数学級編制のよさを生かし、個に応じたきめ細かな学習指導を行い、また、第2・3学年においては、習熟の程度に応じたきめ細かな指導を行い、生徒一人一人の確かな学力の向上を目指す。

2 実践の概要(第3学年の実践)

(1) Q-Uテストを活用した学級・学習集団の育成

① Q-Uテストの「学級満足度尺度」、「学校生活意欲尺度」のデータから「学級生活満足群」、「侵害行為認知群」、「不満足群」、「要支援群」、「非承認群」の生徒を把握し、また生徒支援レベル早見表から「一次支援レベル」、「二次支援レベル」、「三次支援レベル」の生徒を把握し、各学級の実態を学年教師団で共通理解し、これからの学級経営の取組や授業における生徒一人一人への対応の仕方について話し合った。

その結果、学級の中でどの生徒にどのような支援をすべきかがわかり、教師が意識して声をかけたり、授業での意図的指名をしたりするのに役立った。それぞれの「群」の生徒たちが自分の存在感をもち達成感を味わえるように支援することで、生徒は、「いつも先生に見守られている」、「先生に認められている」「先生は自分のことをちゃんとわかってくれている」という思いをもつようになり、生徒と教師のさらなる信頼関係の構築につながった。また、意図的な教師の関わりが生徒同士の人間関係や集団づくりにより影響を与えたと思われる。

(2) 数学科の授業におけるTT及び習熟度別指導の実際

① 協同教育における個々の学びをつなげる指導

校内研修では、主体的で自律的な学びの構え、確かに幅広い知識習得、仲間と共に課題解決に向かうことができるコミュニケーション能力、さらに、他者を尊重する民主的な態度等の資質・能力を身に付けることを目指す協同教育の充実を図っている。第3学年数学科では、組織的、継続的なTTによる指導を実施し、生徒の問いを生かした学習課題を設定し、自ら主体的に他の生徒と協同してグループでの話し合いや操作活動を通じたコミュニケーション活動を重視した。2人の教師は、学習状況を把握しながら、生徒同士の話し合いのちょっとしたつぶやきや困っている状況を見逃さずアドバイスしたり、話し合いの方向性の修正をしたりして、より話し合いが深まるように個々の学びをつなげる指導を行った。

② 一斉指導における確かな見取りと意図的支援

一斉指導においては、生徒の思考を想定し、確かな見取りと個に応じた指導支援を行った。机間指導の中で生徒のつまずきに対応し、数学を苦手とする生徒に対してT2がより具体的に説明をし、



練習問題を解く際、解き方や考え方を指導している。また、数学の得意な生徒に対しては、多様な考え方を引き出せるように支援し、より数学的な考え方が身に付くようにした。

③ 各単元における学習内容の定着を図る習熟度別の授業

各単元毎に1回程度、単元の最後に行う単元テストの結果を本人に振り返らせ、それを基に生徒の希望に応じて習熟度別学習を行った。教科書の例題程度の難易度の問題を行う「基本コース」と高等学校入試問題程度の難易度の問題を行う「発展コース」に分かれ、それぞれの教師が指導にあたっている。

	基本コース	発展コース
問題設定	○単元テストの基本問題の類題	○発展的な問題（高校入試程度）
解法	○個人での解法 ・グループでの話し合い ・教師の指導を中心とする	○個人での解法 ・グループでの教え合い ・教師はアドバイザー
解答確認	○教師が採点を行う。 ○一人一人のつまづきを確認しながら今後の学習のポイントについてアドバイスを与える。	○模範解答による個人採点 ○わからない点について教師が解法のポイントを教える。

TTを活用した少人数指導により、生徒同士のコミュニケーション活動に対して個別指導が充実し、生徒が課題解決に向け、より積極的に取り組む姿が見られ、話し合いが活発になるとともに深まりが出てきた。

表 コミュニケーション活動に対する生徒の感想（4段階評価による）

質問項目	評価
積極的に取り組むことができましたか	3.4
課題解決をするために級友と協力することができましたか	3.5
級友の考えや意見を尊重することができましたか	3.4

単元のまとめの中で習熟度別学習を取り入れたことで、定期テストなどの結果が向上し、標準偏差の値が小さくなってきた。それに伴い、数学に対して前向きに取り組もうという機運が高まりつつある。

3 実践の成果と課題

- TTの役割を明確にし、Q-Uテストの結果を活用して一人一人の生徒に積極的に関わったので、基礎的基本的な内容の定着が図られるようになり、それが生徒の意欲に結び付き、さらによりよい学級・学習集団の育成につながっている。
- 少人数学級において、Q-Uテストの結果を活用し教師が一人一人の生徒にきめ細かに指導することによって、生徒と教師、また生徒同士の信頼関係がより高まり、学校全体が元気で明るい雰囲気になっている。
- TTの指導では、教師同士の打合せの時間をしっかり確保することが難しい。そのため、今後は少しの時間でも、教科、学年等の垣根を越えて、同僚性を生かしながら教師同士が生徒の状況について共通理解を図り、さらに効果的な運用ができるようにしていきたい。また、Q-Uテストの結果を基にした生徒への支援は、1時間では人数的に限界があるので、計画的に関わることができるようになる必要がある。